

校長通信「つぶやき」 佐伯市立鶴谷中学校 校長 渡邊和彦

令和6年7月1日 第14号（通算第69号）

○必ず視聴するテレビ番組

癖のようになって必ず視聴するテレビ番組がある。「所さんの目がてん」回によってバラバラだけど「かがくの里」の特集が特に好きだ。里山の再生がテーマだけど、何年もかけて本当に理想的な里山になっていっている。あのような里山で余生を過ごしたいと夢見る。

「出張お宝鑑定団」も必ず観る。私は家族以外、お宝といえる物は持っていない。だけど、あの番組を観ると知らなかった芸術家、歴史、文化、偉人の功績などが短い時間で興味深く伝わり、たまらなく満ち足りた気持ちになる。

「鉄腕ダッシュ」も大好きだ。無人島の取り組みに参加したくなる。馬鹿げていると思われることに、真面目にチャレンジするところも痛快だ。無人島で鉄を作った。溶鉱炉作りなんて、日本の近代化を再現しているようで感動した。電話も竹や電池などを手作りに挑戦し、本当に通じた。物作りに携わってきた先人、職業人に尊敬の念が湧いてくる。私はアルバイトの経験以外は学校や教育関係の仕事しか知らない。それも終わりに近づいている。もっといろいろな事を知り、体験したかった。

「博士ちゃん」も大好きだ。ちょっと前なら「変わり者」とか「ガリ勉君」とか「オタク」とか言われ揶揄された（あってはいけない事）ような子どもたちが主人公だ。子どもたちのやりたいことをとことんやらせ、子どもたちを信じている親御さんに頭が下がる。そして時には涙し大笑いしながら、その子たちにエールを送る、お笑いのサンドイッチマンや芦田愛菜さんに強く好感を抱く。

「鉄腕ダッシュ」ほどではないにしろ「世界の果てまでいってQ」も部分的に好きだ。部分的というのは出川哲朗とみやぞんが特に・・・ということ。出川の英語でチャレンジする姿は、英語教育の原点を見る思いだ。とにかく何かを言う！勇気と情熱だ。正しいか正しくないかはどうでも良い。伝えようとする意欲の問題だ！みやぞんは、諦めない。やり遂げる。ブレークスルーを自ら体現してくれる。「成せばなる」事を教えてくれる。

「プロジェクトX」を観る度に落涙している。時々、アンコール企画が放送される。戦後まもなく沖縄に導入された「公衆衛生看護婦」（※当時の呼称）の回では番組終了後もしばらく涙が止まらなかった。自分の子どもがポリオに冒され、足が麻痺しているにもかかわらず、離島の結核患者や病気で苦しむ島民のため、泣きすぎる子ども達を残し、仕事に出る母親。「うそだろ・・・」と思いながら観ていた。その子どもたちは成人し「母親のあの姿が、私たちに素晴らしい教育をした。」と語る。娘は美容院を開業し、息子の一人は大学教授になり、ポリオに罹患した弟は、アメリカで外科医になったそう。治療費が払えない人からはお金は取らないという。本や映画やテレビや先輩の話は、一度しか生きることのできない人生を、何度か仮想体験させてくれる。有り難い。

